

林  
実  
歩

「  
束  
の  
間  
」

登場人物

花子(20)  
コタロー(?)

大学2年生  
洗濯機

○家・中（夕）

暗い部屋。静かな洗濯機。

鍵が開く音。ドアが開き、花子（2

0）、入ってくる。

花子「ただいまー」

花子、コタローにもたれかかる。

花子「…そっか」

×

×

×

花子、コタローに洗剤、柔軟剤を入れ、洗濯物を入れる。

蓋を閉め、洗濯スタートのボタンを押す。

コタロー「花子！おかえり！今日は何食べるの？」

花子「醤油ごはん」

花子、座ろうとしてよろける。

コタロー「どうしたの？」

花子「寒。今年は雪降るかもね」

コタロー「何？それ」

花子「え、そっか知らないか。教えてあげる」

コタロー「やったー」

花子「いただきます」

コタロー「どうぞー」

タイトル『東の間』

花子「でもさ、大人になったら雪が降ったからといって何も無いんだよね。嬉しいけどね」

コタロー「なんで？花子も作ったらいいじゃん。その…」

花子「雪だるま？」

コタロー「うん」

花子「分かってないなあコタローは。作りた  
いけど作らない訳じゃないんだよ」

コタロー「どういうこと？」

花子「大人になるってそういうことだよ」

コタロー「分かんないよ。そもそも大人って何なの？」

花子「お。じゃあ次はそれを教えてあげよう」

コタロー「やったー！」

残り1分の表示。

花子「あ、でもそろそろ終わりか。また明日

だね」

コタロー「あー」

ピー。ピー。

静寂に包まれる部屋。

○（朝）

花子、慌ただしく身支度をする。

花子「行ってきまーす」

花子、コタローを撫で、家を出る。

○

窓から入る光。暗い廊下のコタロー。

○（夜）

洗濯の音。

コタロー「花子ー？花子？はーなーこー」

花子、風呂場で服を手洗いしている。

花子「いるよー」

コタロー「どこにいるの？何してるの？」

シャワーの音が止み、花子がくる。

花子「これ、汚れちゃったから洗ってた」

花子、濡れた服をコタローにかける。

コタロー「わあ！ひんやりしてる」

花子「ふふ、うん」

コタロー「おかえり」

花子「ただいま！あ、そうだ」

花子、コタローに観葉植物を見せる。

花子「じゃーん。みてこれ。葉っぱが育つん

だつて」

コタロー「えー。変なのー」

花子「かわいいじゃん。ここに置いてあげる」

花子、観葉植物をコタローに乗せる。

花子「倒さないでね」

コタロー「いつ葉っぱ生えてくる？」

花子「いつかなあ。だいぶ先だと思うよ」

コタロー「名前つけようよ」

花子「いいよ。何にする？花太郎とかどう？」

コタロー「変だよー。ジローは？」

花子「ジロー？兄弟みたい。じゃあジローね」

コタロー「うん。：花子？あのさ」

花子「？」

コタロー「テレビ、見てみたい」

花子「テレビ？」

コタロー「この前言ってたでしょ。面白いド

ラマがあるって」

花子「ああ、いいよ。一緒に見よっか」

コタロー「でも、あっちの部屋でしょ？」

花子「大丈夫」

花子、コタローを持ち上げようとする。

花子「え、重！ダメだ！」

花子、座る。

花子「無理だった。ごめん」

コタロー「いいよ」

○

花子、みかんを食べる。

花子「ねえ。もしさ、私の友達が遊びに来たりしたら、コタローは喋らないでね」

コタロー「なんで？」

花子「普通の洗濯機は喋らないんだって」

コタロー「ふーん。誰かに言われたの？」

花子「うん。まあ、実家のも喋らないし」

コタロー「気にしなくていいんだよ」

花子「気にするよ。コタローには分かんないだろうけどさ」

○（夜）

花子、帰宅する。

花子「ただいま」

洗濯を始める。花子、廊下の電気を消し、リビングに行く。

コタロー「あれ？花子？またお風呂？花子おかえりー」

返事がない。



コタロー「いないの？」

耳を塞ぐ花子。

○

花子、洗濯カゴに服を入れる。

だんだん入りきらなくなり、足で押し込む。

山盛りの洗濯物。

○（夜）

花子、帰宅。電話している。

花子「あはは。本当に？」

花子、カーテンを開ける。

花子「雨降ってない」

花子、カーテンに包まって遊ぶ。

花子「…うん。え？今から？あー」

花子「…そっか。みんないるんだもんね。じ

やあ行こうかな」

暗い廊下のコタロー。

花子「いやいや。嫌じゃないって。楽しみー。

うん。ありがとう。はい」

花子、カーテンを閉めず、外に出る。

○

ひとりぼっちのコタロー。とても長い

時間。

ジローの髪が伸びる。

○（夜）

雨が降っている。花子、俯きながら部

屋に入る。

○

山盛りの洗濯物。花子、バツが悪そう

に見つめる。

コタローの蓋を開き、洗濯物を入れる。

花子「…量多いけど、頑張って」

スタートボタンを押す。

花子、怯えるように耳を塞ぐ。が、コ  
タローの声はしない。

花子「コタロー？」

沈黙。

花子「ごめん。ごめん。ごめん」

コタロー「花子。おかえり」

花子、顔を上げ、ほっとした顔。

コタロー「嫌いなら、なんで友達になった

の？」

花子「え？」

コタロー「花子が言ってくれたんだよ。友達  
になろうって」

花子「…おかしいでしょ。洗濯機と友達とか」

花子、ポカポカとコタローを叩く。

コタロー「いたっ。痛い痛い。痛いよ。やめ  
てよ花子」

花子、悲しそうに座り込む。

花子「痛いわけじゃないじゃん。本当はいないん  
だもん。コタロー」

コタロー「いるよ」

コタロー「花子に聞こえるなら、いるよ」

○（朝）

花子、コタローの中を覗く。

花子「おはよう」

花子「私思い付いたよ。コタローに外を見せ  
てあげる方法」

○

花子「一緒に歩けばよかったんだね」

花子、コタローをベランダに運び出す。

ジローの水を入れ直し、コタローに置  
く。

花子「髪伸びたな」

○ベランダ

ベランダに並ぶ花子とコタロー。

花子「雪降らなくてごめん」

花子「どう？コタロー」

花子「なんか、考えたんだけどさ、コタロー  
が本当にいるかどうかは、どうでもいいの  
かもね。人間の友達だって、見えてるだけ  
で本当はいないかもしれないし。コタロー  
はどう思う？」